

会長就任にあたって

清水英範（日本写真測量学会 会長）



去る5月19日の定時総会で役員改選が行われ、その後の理事会において会長に就任しました。

私は1985年に入会しましたので、会員歴はかれこれ37年に及びます。この間、村井俊治先生や近津博文先生など諸先生のご指導の下、小野邦彦さんや藤野千和子さんなど敬愛する諸先輩、そして楽しい仲間や後輩たちと一緒に実に多くの貴重な経験をさせていただきました。例えば、村井先生が大会実行委員長を務められた ISPRS 京都大会での若手運営スタッフとしての経験や、近津先生が ISPRS の第5部会長をされていた時のセクレタリーとしての経験。また、学会の事務局局長時代に行った一般社団法人化や CPD 制度の創設、編集委員長として取り組んだ学会創立40周年と50周年の記念出版等の経験です。

これらを通し、写真測量学会は私にとって最も愛着のある学会になりました。その学会で会長として仕事ができますことは大変光栄なことです。

写真測量学会は正会員数で千人少しですので、決して大きな学会ではありません。しかし、その活動は大変活発です。年に6回、学会誌「写真測量とリモートセンシング」を発行し、年に2回、春と秋に年次学術講演会を開催しています。また、ISPRS や AARS (アジアリモートセンシング協会) の日本代表組織として、国際的な活動にも積極的に取り組んでいます。

千人規模の学会でどうしてこれだけの活動ができるのでしょうか。私が思うにそれは、この学会には権威

主義とは無縁の大らかな雰囲気があり、それにより会員の皆様が規則や形式、人間関係に過度に拘束されることなく、自由に楽しく元気よく活動できる環境があり、そして、そこから生まれる和やかで、かつ力強いチームワークがあるからだと思います。

私は会長として、この学会の雰囲気、環境、チームワークを大切に、会員の皆様と一緒に、現在の活動を安定的に継続させていきたいと思っています。それが私の役割であると自覚しております。

もちろん、課題もあります。私が最も懸念していることを申し上げておきたいと思います。昨今のコロナ禍やロシアのウクライナ侵攻等に起因し、多くの人たちや企業の思考や行動様式がドラスティックに変化しているといったことがよく言われます。そのような中で、会員の皆様の学会活動への参加意欲、とりわけ国際的な活動への意欲に何がしかネガティブな影響があるのではないかとということです。

講演会の論文数や国際学会への参加者数が一時的に減るのは仕方ないにせよ、そういったことが、皆様の思考や行動様式の変化によって常態化、恒常化していくことを私は心配しています。それが科学の発展にとって良い方向であろうはずがないからです。

どのような学会であれ、学会はいま踏ん張り時だと思います。学会の活性化はいつの時代でも必要なことですが、そのことをこれまで以上に真剣に考え、目標として高く掲げるべき時期だと思うのです。

写真測量学会においても、学会の活性化を最重要かつ喫緊の課題とし、そのために役員が率先して努力していくつもりです。評議員の皆様にもそれをお願いしたいと思います。そして何よりも、学会の活性化のためには、会員の皆様の学会に参加してみよう、交流してみよう、学会で発表してみよう、議論してみようという前向きな姿勢が必要です。

そのことを切にお願いし、会長就任のご挨拶とさせていただきます。よろしくお願ひいたします。